

ろうけつ染めで胸元を演出

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりにも挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクターのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。



プレゼンテーションの様子

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主権のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメン

バーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI〜新しい匠、新しい暮らし〜」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

山梨県選出の匠、染色作家の古屋絵菜さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

豊かな自然環境が作品作りの原点に

古屋さんは、染色技法の一つ「ろうけつ染め」により、絵画のようなテキスタイルアート作品を制作している。

美術大2年のときから本格的に染色を学び、「よりアートに近い作品を作りたい」と、染色家である母・真知子さんと同じろうけつ染めの技術を磨いた。

一般的なろうけつ染めは、溶かしたろうで布に模様を描き、染料で染める。ろうを取って水洗いするとその部分は白く残るといふ染色方法。

古屋さんは、筆で染色した箇所の上をろうを載せてマスクインクする作業を数十回と繰り返して絵を描き、最後に背景を染め、ろうを取るなどの複雑な技法を使い、より繊細な作品を手掛けている。

作品のテーマにしているのは花。「花は人間に一番近い自然物で、生と死を最初に教えてくれるものだと思います。花が持っている美しさと、その裏にある畏怖のようなものをどう表現するべきか、いつも考えています」

工房は、甲州市大和町の自宅に構える。山や川が近くにあり、「作品にしたい花があれば山に登ったり、川の上流に足を運んだりして、実物を見に行きます」と話す。作品作りには生まれ育った自宅周辺の自然環境が必要だと感じている。

プロダクト作りの経験は2年前、都内の呉服店から依頼された、着物帯のみ。「帯は『お太鼓』をキャンバスに見立てる感覚で制作でき、普段の作品の延長線上でした」

今回のプロジェクトで取り組んだ最初のプロダクトはネクタイ。山梨県がネクタイ生地産地であり、これまでにならないうけつ染めのネクタイがなかったことから、「身に着ける絵画」をテーマに制作を始めた。しかし、プロダクト作りを進める中、人が身に着けるもので絵画を成り立たせることの難しさを実感。「販売価格を下げるためには手染めではなく、プリントの方がいいかもしれない」などの迷いも生まれた。

昨年9月、古屋さんの自宅でエリア・コンサルティングを行った。下川氏が訪れ、「プリントではなく手染めにこだわるべき。もっとアート性を高めていい」とアドバイス。古屋さんの迷いは晴れ、「ハードルはあってもアート性を高めていく決心が付いた瞬間でした」と振り返る。

下川氏はセット商品としての展開も薦め、古屋さんが最終的に完成させたプロダクトはネクタイ、チーフ、スカーフの3種類。プロダクト名は、ネクタイという意味の中国語の発音から「ling dai. (リン ダイ)」と名付けた。



甲州市大和町の風景



完成プロダクト「ling dai.」

アート性極め特別な時彩る

を考えて構図を決めました。四角いエリアのみで考える構図とは全く異なり、苦労はしましたが成長もできました」と感じている。

ネクタイ生地産地の山梨県の「匠」として、今まではなかったろうけつ染めで制作した新しいネクタイを提案できたことには達成感がある。しかし、プロダクトそのものの完成度という点では、「まだまだ満足はできていません」という。

自分自身について「デザイナーではなく絵描き」と表現するように、これまではアート作品作りに没頭し、プロダクト作りには関心がなかった。それが、今はプロダクト作りに強い興味を湧かしている。「アートの制作とは違う、新しいチャレンジにとでもわくわくしました。今はもっと新たなプロダクトを生み出してみたいと思っています。今回のプロジェクトはとも貴重な経験になりました。プロジェクトは古屋さんに新たな創作意欲を生み出した。

絹の生地にならうけつ染めで、花卉や葉、茎を丁寧に描いた。筆を使って染めていく手染めの一点もので、価格も高い高級製品。女性から男性へのプレゼントとしての提案だ。「結婚式やパーティーなど特別な場面で着けてほしい装飾です」と話す。

ネクタイは、男性が着けるものなのでケシは茎のみ、チューリップは花弁のみ、マーガレットは葉のみを描くなど、デザインが女性的にならないように工夫。花をテーマにしながら花そのものを表現しないということは、これまでの作品では取り入れたこ



古屋さんの作業風景

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

広告



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



1月17日、プレゼンテーションにて



古屋さんが使う筆や染料



古屋 絵菜 山梨/染色作家

山梨県甲州市生まれ。2011年武蔵野美術大学大学院工芸工業デザイン科を修了。主に縹織(ろうけつ)染めを用い、花をモチーフとした作品を制作する。日本、上海を中心に活動中。2013年にはNHK大河ドラマ『八重の桜』5月オープニングタイトルバックに作品が起用される。また2016年やまなし大使に就任。KUMAMOTOビエンナーレ2010入賞。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT

